

デザイン学科

キーワード

透明性、多層時間モデル、北欧建築、北欧デザイン、スウェーデン、アスブルンド、地域デザイン



教授 / 博士（学術）

川島 洋一

Yoichi Kawashima

学歴

千葉大学 工学部 建築学科、京都工芸繊維大学大学院 工芸学研究科 修士課程、スウェーデン国立
ルンド大学大学院 博士課程、京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科 博士後期課程

経歴

スウェーデン政府奨学生、日本学術振興会 特別研究員PD、京都造形芸術大学・京都精華大学
非常勤講師、デザイン事務所自営、福井工業大学講師・准教授・教授、意匠学会作品賞（2012）

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

21世紀のライフスタイルとそれにふさわしい住環境デザインに関する研究・執筆・作品制作、
福井の地域資源を生かした環境や商品の提案、北欧デザインに関する講演や執筆

メールアドレス

kws@fukui-ut.ac.jp

主な研究と特徴

「建築デザインにおける【透明性】の研究と制作への応用」

1998年の初代iMacの発売は、中身が透けて見えることに意味がないコンピュータ（の軀体）に「透明性」の表現が用いられたことにより、現代デザインにおける装飾性の意味を象徴する出来事となった。本来は中身を隠したいはずの若い女性のバッグが透明になり、プロダクトデザインやパッケージデザインにおいても透明な表現が増えたのは、偶然ではなく情報化時代の人間が求める感覚と関係があるに違いない。本研究は、建築やデザインの分野に現れた「透明性」を現代的な装飾表現の一種と仮定し、その表現手法を分析し、制作現場における実践に応用する試みである。

現代建築では、コーリン・ロウが1963年の論文において指摘した「実の透明性」と「虚の透明性」の複数の手法を組み合わせることにより、多層性のある視覚表現を行うことがデザイン手法として定着した。そこでは外側（表）から内側（奥）へと向かって複数の位相が設けられ、段階的な奥行きの重ね合わせが示唆される。これは空間の複層性であるとともに、時間の複層性を意味する。このような複層性のある透明表現の手法が追求されてきたことは、単なる造形上の手法を超えて、デザインする対象が視覚的な造形表現から、対象物の中身の価値につながる表現へと変化したことを表すと考えられる。この「透明性」に着目することにより、20世紀の近代建築（モダンデザイン）が否定あるいは「ないかのごとく無視」してきた「装飾性」について議論し、デザイン手法として意識的に研究することにより、実際の制作活動へと展開している。【図1】【図2】

本研究の骨子は、川島洋一「装飾と透明」、藝術学関連学会連合 第12回公開シンポジウム「21世紀、いま新たに装飾について考える」（デザインクリエイティブセンター神戸）、2017年6月開催における招待講演として発表した。

「北欧スウェーデンの近代建築史とデザイン史」

スウェーデンにおける近代建築の成立過程について、19-20世紀転換期の建築思潮「ナショナル・ロマンティズム」に着目して行った研究「スウェーデンの近代的住宅像形成過程におけるカール・ラーション自邸の意義」『意匠学会会誌 デザイン理論』1996年や、同国20世紀を代表する建築家グンナル・アスブルンドに関する研究（論文としては「アスブルンドの初期の活動について」『日本建築学会計画系論文集』No.499、1997年）ほかがある。関連する成果は、下の主要論文・著書で示した文献のほか、川島洋一（監修）「建築家グンナル・アスブルンド 憲しのランドスケープ展」松下電工汐留ミュージアム 2006年および「同巡回展 京都・旭川・札幌会場」2006-2007年、および川島洋一（監修）「スコーゲス・シュルコゴーテン（森の墓地）」TBSテレビ「世界遺産」2006年2月5日全国放送など、またこれらの機会に行なった一連のシンポジウムや講演会、出版物を通して発表した。【図3】



図1. 川島+川島研究室 福井工業大学デザインスタジオ 2008年



図2. 川島+川島研究室 福井工業大学キャリアセンター 2011年



図3. 川島執筆による北欧関係の書籍・雑誌論考（一部）

今後の展望

これらの研究課題は、それぞれ別のテーマを扱っているよう見えるが、21世紀型の環境意識と高度情報化による新しいライフスタイルの出現、それにふさわしい住環境デザインと、地方都市における地域課題の解決という問題意識において多くの共通点と接点が見出せる。このパラダイムシフトは、2020年代にますます顕著となることが予想できるので、研究、制作、教育、社会貢献にまたがる活動を通して実践していきたい。

本学においては、2009年のデザイン学科の新設にあたり設立準備段階より関わり、11年間にわたりデザイン教育（およびその中の建築教育）に携わってきた。その間に経験したカリキュラム編成やその再編、実践的なデザイン経験を学生に積ませるために工夫などの試行錯誤を繰り返すことにより、都市部に位置する大学のデザイン教育とは異なる、地方ならではのデザイン教育が成立する要件について、考察を行ってきた。それは上述した、学生と一緒に現在進めている、福井の地域資源を生かしたデザイン活動へつながっている。今後はこの経験を、教育論文としてまとめてることにも取り組んでみたい。

所属学会

- | | |
|-------------|--------------|
| 日本建築学会 | (昭和61年～現在まで) |
| 意匠学会 | (平成5年～現在まで) |
| 日本デザイン学会 | (平成29年～現在まで) |
| 日本工学教育協会 | (平成13年～現在まで) |
| 北欧建築・デザイン協会 | (平成14年～現在まで) |
| 地域デザイン学会 | (令和元年～現在まで) |

主要論文・著書

- | |
|--|
| 『アスブルンドの建築 1885-1940』川島洋一(文)・吉村行雄(写真)
TOTO出版 (2005年 ISBN 978-4-8870-6257-5) |
| 『北欧文化事典』分担執筆 丸善出版 (2017年 ISBN 978-4-6213-0171-5) |
| 『グンナル・アスブルンド展図録』松下電工汐留ミュージアム (2006年) |
| 川島洋一「瑞暉亭と北欧の近代建築」『建築史論聚』 中村昌生先生喜寿記念刊行会編 思文閣出版 (2004年 ISBN 978-4-7842-1202-7) |